

ほらふきから語り手へ¹

ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』における日常と非日常の往還

三好 鮎子

目次

1. 現実—非現実?
2. 日常—非日常
3. 名・物語
4. 往還の体験から得たもの

序

それはバスチアンが体験する、かれの神話なのです。そして、バスチアンは、あの夜、かれの神話を体験するからこそ、翌日には、外の世界にも向かうことができる力を、かれ自身のなかに見つけることになるのです。

この力を見つけるにはどうしても自分自身の神話が必要なのです。²

ミヒャエル・エンデ (1929-1995) は『はてしない物語』³ (Die unendliche Geschichte, 1979) について、「個人の神話の構想を描こうとした試みの一つ」とであると語っている。エンデの言う神話とは、人間の生の矛盾をまとめる「ビジョン」、つまり生に秩序をもたらすものことであり、物語もしくは絵によってのみ実現できるものであるという。⁴ 上のようなエンデの言葉は、『はてしない物語』が、ある種の成長小説として読まれること⁵に妥当性を与えている。

たしかにバスチアンは、「はてしない物語」を読むことによってポジティブな変貌を遂げる。勇気や責任感といったものが芽生えており、父やコレアンダー氏との関係も好転する。しかし、「外の世界にも向かうことができる力を、かれ自身のなかに見つける」とエ

¹ 本稿は、2008年度のドクターコロキウムにて発表した原稿を大幅に加筆修正したものである。

² 田村都志夫 編訳：『ものがたりの余白』（岩波書店）2000、66頁

³ 〈はてしない物語〉の表記について：作品そのもののタイトルを二重カッコ『』で、物語のなかでバスチアンが読むものを一重カッコ「」で表記する。

⁴ 田村、63-65頁

⁵ 梅内 幸信：人格変成能力としてのファンタジー——ミヒャエル・エンデの「はてしない物語」における過去の記憶の再構成について [『九州ドイツ文学』15号、2001、1-10頁]、藤田 総平：ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』論——物語論の観点から—— [『社会科学論集』117号、2006、47-68頁]などを参照。

ンデも表現しているように、若い主人公が「生来の素質を発展」⁶させることが Bildungsroman/Entwicklungsroman と呼ばれる小説を特徴づける一面であるなら、最大の変化と言えるのは、〈想像し語る〉というバスティアンの特性の意味が、ネガティブなものからポジティブなものとなったことではないだろうか。バスティアンの特性の意味の変化こそが、「生来の素質」の展開・成長に当たるからである。そのように考えると、この物語の主眼は、バスティアンの人格的成長や人間関係の改善というよりは、「ほらふき」と呼ばれていた彼が成長して作家——芸術家としての語り手——となったことが示唆されている点にあるように思われる。エンデ自身、この作品のテーマについて、「〈ものがたる〉ことをものがたる」⁷とコメントしている。『はてしない物語』は、エンデの詩学の結実した、語り手論として読むことができるのである。

「はてしない物語」を読むとは、バスティアンにとってどのような意味をもつことだったのだろうか。バスティアンが往還したのは、どのような世界のあいだだったのか。これらのことを詳細に検討してみると、バスティアンがファンタージェンで得た特別なもの——〈想像し語る〉というバスティアンの特性を展開させたもの——の姿もまた見えてくる。

便宜上、バスティアンが本を読み始めるまでの場面を「プロローグ」、本の中へ入るまでの1～12章を「前半」、入ってから出るまでの13～26章半ばまでを「後半」、本から出たあとの26章後半を「エピローグ」と呼ぶ。

1. 現実—非現実？

『はてしない物語』の舞台となる二つの世界——赤い文字の世界と、緑の文字の世界——は、〈現実—非現実〉という対比において理解される傾向にある。⁸緑の世界の方は、「空想の世界」、あるいはそのまま「ファンタージェン」と呼ばれることも多い。しかしいずれの場合にも、他方の赤の世界が〈現実〉と見なされていることから、緑の世界は〈非現実〉ととらえられていると考えてよいだろう。赤の世界とは主人公バスティアンの読む本の外、緑の世界とはその中である。つまり本の外が〈現実〉であり、中が〈非現実〉であるとされる。しかし、この対比は一貫して有効なものだろうか。

⁶『集英社世界文学大事典』第5巻（集英社）1997、214頁「教養小説」（項目執筆：池田信雄）

⁷ 田村、24頁

⁸ たたとえば、以下の論文を参照。酒井 明子：M. Ende “Die Unendliche Geschichte”の意図せざる意図 [『横浜商大論集』22-1号、1988、211-23頁]、土屋 洋二：ミヒャエル・エンデ「はてしない物語」の構造 [愛知大学語学教育研究室『言語と文化』3号、2000、45-57頁]、近藤 悟：『はてしない物語』の源泉：M.エンデ『だれでもない庭』を手がかりに [関西学院大学人文学会『人文論究』56(4)号、2007、124-139頁] また、エンデ没後5周年記念号のタイトル „Zwischen Phantasie und Realität“も、この対比となっている。Vgl. Zwischen Phantasie und Realität. Michael Ende Gedächtnisband 2000. Hrsg. von Jacek Rzeszutnik. Passau, 2000. (=Fantasia 136/137)

バスティアンの想像は、いやいやながら現実 (in die Wirklichkeit) にもどってきた。このはてしない物語が、現実とは (mit ihr) 何の関係もないということが、バスティアンにはうれしかった。

誰かごくありきたりの人たちの、ごくありきたりの人生から、ごくありきたりの出来事が、不平たらたら語られる本は好きじゃなかった。そういうことは現実 (in Wirklichkeit) で十分だった。(S. 25f)⁹

「ああ、よかったなあ」彼は小声でひとりごちた。「ぼくがファンタージェンにいるのではなくて。あんな怪物は、ありがたいことに実際には (in Wirklichkeit) いないよ。これはみんな、どうせただのお話 (nur eine Geschichte) なんだ」(S. 73)

初めの方では、バスティアンは確かに本の外の世界を「現実 (Wirklichkeit)」、中の世界を「ただのお話 (nur eine Geschichte)」ととらえている。ここでは、前者と後者とは明確に分かれている。バスティアンにとって、本の外の世界とは「ごくありきたりの人生」「ごくありきたりの出来事」で満たされた、つまらないものである。本の外の場面として、家庭と学校の様子が事細かに語られるが、バスティアンはどちらにおいても疎外感を抱いている。母を亡くし、父にも向き合ってもらえず、ただ一人話を聞いてくれる存在だった少女とも、家政婦によって遠ざけられる。学校でもクラスメートにいじめられ、教師にも辛く当たられ、授業そのものも面白くない。

そのようにネガティブな様相でありつつ、本を読むバスティアンにとって、本の外はまた安全な場所でもある。アトレユたちのところへ行きたいと無邪気に願ったかと思えば、恐ろしい怪物のところへ行くのはごめんだと臆したりする——安全な場所にしながら、「ただのお話」としての冒険を楽しむという構図がここにはある。本の中は、いわゆるバーチャル・リアリティと言ってもいいだろう。

しかし、「ただのお話」と言った直後に、バスティアンはそれを疑い始める。

でも、本当にただのお話？ それならどうして、イグラムールに、それにたぶんアトレユにも、ぼくが怖くてあげた叫び声が聞こえたかもしれないのかな？
(S. 73)

自分の声に登場人物が反応したらしい——この不可解な出来事を皮切りに、バスティア

⁹ Ende, Michael: Die unendliche Geschichte. Stuttgart, 1979. 作品からの引用は同書に拠る。以下、同書からの引用は、本文中に頁数のみを示す。

ンは、自分が文字通り本の世界に引きずり込まれかけていることに、否応なく気づかされる。「ただのお話」の国に過ぎないはずのファンタージェンに、バスティアン自身が実際に入っていく行かなければならないことが、次第に明らかになる。バスティアンは臆する。

バスティアンは恐くなってきた。急に、もう息もできない気がした。目に見えない牢に閉じ込められたような心地だった。読むのをやめよう、もう読みつづけるもんか。

(…)バスティアンは、どうすることもできなかった。耳をふさいだが、声自分のなかから響いてくるので、何にもならなかった。(S. 188)

ところが突然、ずっと夢だったことが現実になり (Wirklichkeit wird) そうになると、人はただもうひとつのことしか望まなくなるものだ——あんなことを望むのではなかったと。

ともかくも、バスティアンがそうだった。

ことが仮借ない真剣さを帯びてきたいま、バスティアンはよっぽどそこから逃げだして (davongelaufen) しまいたかった。ただ、今回の場合には、「そこから」は、もはや存在しなかった (Nur, dass es in diesem Fall kein »davon« mehr gab)。そこで彼は、あおむけのかぶと虫のように、死んだふりをしてみた。もちろん何の役にも立ちしなかったが。バスティアンは、あたかも自分が存在しないかのようにしたかった。じっと息を殺して、できるかぎり小さくなってしまいたかった。

(S. 189)

バスティアンはアトレューユのところへ行きたいと夢見ていたのだが、それは自らが安全な場所にいるかぎりでのことだった。そうすると、ここでの〈夢〉とは、叶わないことを知りつつ憧れることを意味する。それは受動的な行為であり、危険にさらされることはない。それに対して、ここでの〈現実〉とは、否定的な意味を帯びたもの——そこで起こることが他人事ではないところ、いやな思いをしたり、危険な目に遭ったりするかもしれないところ、自ら能動的に動かなければならないところ——である。なぜなら、それに直面するとき、「あんなことを望むのではなかった」と否定し、逃げたくなるべきものとされているからだ。

いじめから逃げ、成り行きで学校をさぼり、現実逃避するバスティアンは、新たな〈現実〉に直面してまたもや逃げ出そうとする。しかし今回の場合には、逃げ出せるような「〈そこから〉がもはや存在しない」という。どういうことだろうか。

バスティアンが逃げ出したいのは、自分がファンタージェンに行かなければならないという事実からである。バスティアンが直面しているのが、不気味な本から逃げ出すだけの

ことであれば、彼は本を閉じてしまえばいいはずである。実際に、バスティアンは読むのをやめようとする。その一方で、もはやこの本を閉じることはできないという気持ちに強く囚われてゆく。そのことは、幼ごころの君の口からも宣言される。

かれはすでに、はてしない物語のなかに入っています。今となってはもう引き返すことはできないし、また、してはならないのです。(S. 172)

ファンタージェンは、バスティアンの〈現実〉の人生に喰い込み、それを包み、彼を囚われの身にする。つまり、逃げ出すべき「そこから」であるはずの、「ただのお話」の国でしかなかったはずのファンタージェンが、いまやバスティアンの生の枠組みとなってしまうのである。逆に言えば、逃げようとするバスティアン自身の生そのものが、逃げ出すべき「そこから」となってしまうている。彼が死んだふりをしたり（事実としての死のふり）、自分の存在に気づかれないようにしようとする（社会的な死のふり）のもそのためである。生から逃げようとするれば、死あるのみだからだ。バスティアンが直面したのは、走る (laufen) だけで逃げ出せるようなことではなかった。走るだけで逃げ出せるような「そこから」は、もはや存在しない。「〈そこから〉がもはや存在しない」とは、そのようなことだと考えられる。

本の中のファンタージェンに行ってみたいという夢が〈現実〉になろうとしている——この時点で、〈本の外=現実〉〈本の中=非現実〉という対比は、バスティアンにとって完全に意味を失う。彼はとうとう本に吸い込まれる。そして、本の中のバスティアンにとって、そこは〈非現実〉ではない。問題解決のすべては自分の望みの持ち方にかかっており、困難なものである。この物語の後半に関して、長すぎる、焦点がぼやけるなどの感想が聞かれる傾向にあることも、その〈現実〉性を裏づけているのではないだろうか。

2. 日常—非日常

〈本の外=現実〉〈本の中=非現実〉と見ることは常識的である。しかしこの構図は、バスティアンにとって意味をなさなくなるものであり、あくまでも第三者の視点からの解釈であると言えよう。それではバスティアンにとって、本の外と中とはどのような差異をもつ世界だろう。彼が往還したのは、どのような世界のあいだだったのだろうか。物語の論理を追ってみたい。

この作品について、「日常性 (Alltäglichkeit)」という主題が織り込まれている、と J. ヘーリッシュが評しているのは示唆的である。¹⁰ヘーリッシュの視座によれば、バスティア

¹⁰ Hörisch, Jochen: Die alltägliche Wiederkehr des Einhorns in der „Unendlichen Geschichte“. In: Akten des

ンが離れ、そして戻ってくる人間界とは「日常 (Alltag)」なのであり、対するファンタジーエンは「非日常的な夢の時間 (nicht-alltägliche Traumzeit)」である。上で見たように、バスティアンは〈現実から逃げて〉ファンタジーエンへ行ったとは言えない。彼が逃げたのは、本の外の世界——家庭と学校——、つまり日常の世界からだったというとならえ方は、ごく自然なものだろう。

〈日常—非日常〉という構図は、人間界とファンタジーエンとを往き来した人間がどうなるかを述べる幼ごころの君の言葉にも、〈ありふれたもの—奇跡や神秘〉というかたちで表れている。

ここにいた人間たちはみな、ここでしかできない何かを、かれらを変えて元の世界にかえした何かを経験したのです。かれらを見る者になりました。(…) それより前にはありふれたもの (Alltäglichkeit) としか思えなかったところに、とつぜん奇跡や神秘を見出すようになったのです。(S. 169)

また、両世界が互いに破壊し合っていることがグモルクにより明かされるが、その言葉によれば、虚無が広がることによって人間界に起こるのは「偽り (Lüge)」の氾濫である。「偽り」は虚言や妄想の類となり、人間の考えを支配するという。そして、無駄な買い物から戦争にいたるまで、氾濫の帰結の例がいくつかが挙げられる。一方、バスティアンの考える帰結は、グモルクの挙げたものには入っていない。バスティアンは自分の体験に照らして、人間界がどのように病んでいるかを認識するのである。

バスティアンはいまや、ファンタジーエンだけが病んでいるのではなく、人間の世界もまたそうであることを理解した。一方は他方とつながっているのだ。(…) みんなが口々に言い張るように、生きてることがこんなにも灰色でつまらないもので、神秘も奇跡もないんだということに、バスティアンはどうしても納得する気になれなかった。彼らは言う——それが人生さ！(S. 145)

人々が「生きていることは灰色でつまらないもので、神秘も奇跡もない」と口々に言うことが、バスティアンの考える病状である。ここにも、〈生きていること—神秘や奇跡〉というかたちで、〈日常—非日常〉の構図がある。また彼は、日常的なことを扱う本を疎ましく、非日常的なことを扱う本を好ましく思っており、「はてしない物語」を後者に属するものとして喜んでいる。自分で作る話も、「これまでになかったもの」ばかりである。¹¹

VII. Internationalen Germanisten-Kongresses. Göttingen, 1986, S. 234-240

¹¹ 本論 95 頁の最初の引用を参照。

20世紀において、日常性なるテーマは「語られるべき緊張の弱まり」なくしては文学にならない、とヘーリッシュはとらえる。¹²極端に考えるなら、〈ありふれた (alltäglich) ことばかりで語ることもない〉という否定的な形でのみ、日常性のモチーフは文学において主題化されうるということだろう。ヘーリッシュによると、虚無の正体も「日常の退屈」である。

ファンタージェンはつまり、文字通り無に脅かされている。そしてこの無化が、あの日常の退屈と同じであることは疑い得ない。その退屈とは、ファンタージェンの側では、語るべき物語が不足していることと同じである。¹³

ファンタージェンの住人は創作能力をもたないため、吟遊詩人の民であるアマルガント人でさえ、昔からある同じ物語を繰り返し語るほかない。この事実が、「語るべき物語が不足していること」とヘーリッシュが見なすものである。「ファンタージェンなどないと思っ
ているからこそ、人間はここへ来ようとしなさい」とグモルクは言う。人間が来なくなったから、幼ごころの君に新たな名づけがなされなくなり、虚無が広がったのだった。そうすると、「ファンタージェンなどない (dass es Phantasien nicht gibt)」の、この〈ない〉(nicht)という否定が、虚無(Nichts)の始まりではないだろうか。ファンタージェンを蝕んでゆく虚無、つまり〈ファンタージェンなどない〉という認識は、「空想力の欠如」「ファンタジーの枯渇」と解釈されもする。¹⁴しかし、ファンタージェンとは「空想力」や「ファンタジー」といった理念的なものではなく、グラオーグラマンの言うように、古今東西の「物語」なのである。物語がないという状況は、〈語ることがないという日常の退屈さの支配〉であると考えられるだろう。

先にも述べたとおり、バスティアンにとっての日常生活も「灰色」なものであった。彼が「ただのお話」を自らの新たな現実とすることを選ぶのは、その「お話」が自分自身の物語にもなってしまったことを理解したからであった。虚無——日常の退屈に侵されているのは、バスティアン自身のファンタージェンなのである。

しかしバスティアンには、「それが人生さ！」と言うつもりはない。そこに、日常生活を生きるということに対する、バスティアンの希望を読み取ることができるだろう。彼は一方で非日常的な物語を志向しながら、他方ではそこに日常的なものを探してしまう——その不在を敏感に感じ取ることによって。イエスさまも普通の人間と同じようにトイレに行ったのではないかと先生に質問したり、本を読みながら、なぜ登場人物たちは途中で用を足しに行かないのかと疑問を抱いたりするのである。

¹² Hörisch., S. 237

¹³ Ibid., S. 238

¹⁴ Vgl. 酒井 (注8) など。

バスティアンにとって、本の外と中との差異とは、〈日常—非日常〉なるものである。彼が成し遂げたのは、日常と非日常とのあいだの往還だったと言えるだろう。

3. 名・物語

それではこの物語において、日常と非日常とを差異づけるものは何だろうか。日常の世界である人間界と、非日常の世界であるファンタージェンとは、それぞれどのような世界なのか。ファンタージェンの特殊な性質については、物語のなかで折にふれて挙げられる（幼ごころの君なる特殊な存在が治めていること、国境がないこと、地理が流動的であり進むものの意志に反応することなど）。しかしここでは、ファンタージェンの住人たちのあり方、そして両世界を往還するバスティアンのあり方に焦点を当てて考えたい。

それぞれの世界において、バスティアンはどのような存在であるのだろうか。彼の特性は「何かを想像すること」(S. 26)、それを言葉にすること、そして物語を作ることである。世界をまたぐことによって変わるのは、その特性の意味である。人間界でのバスティアンの名や物語は虚しく消えるが、ファンタージェンでは現実のものとなる。結論から言えば、両世界を決定的に差異づけているのは、名や物語のあり方である。

3.1 日常の世界における名と物語

コリアンダー氏はバスティアンと自己紹介し合ったあと、次のように言う。「まあいいや、おれたちが何て名前かなんてどうだっていいのさ、また会うことはないんだし」(S. 7)。バスティアンの名が **B** で頭韻を踏んでいることを指摘したあと、自分の名も **K** の頭韻を踏んでいることを指摘されたコリアンダー氏の、きまり悪さを隠す台詞だが、名はここでは軽んじられる。

また、〈想像し語る〉というバスティアンの能力は、プロローグの世界においては虚しいものである。まず、母の不在、父の無関心に加えて、物語の聞き手だったクリスタとも離れ、バスティアンの話は誰にも聞いてもらえない。それゆえ自分で自分に話して聞かせており、そのために「(独り言を言うので) 頭のおかしなやつ (Spinner)」「ほらふき (Aufschneider)」などとクラスメートから馬鹿にされることになる。日常生活において、バスティアンの物語とそれにとまなう名づけは、何の役にも立たないもの、一人で密かに楽しむしかないものである。

3.2 非日常の世界における名と物語

翻って、ファンタージェンにおいては、バスティアンの能力は特別なものとなる。ウユ

ララの語るように、ファンタージェンの住人は、新しい名や物語を創造する能力をもたないからである。

われらただ本の内なるもの
はたすは授かりし使命。
ただ物語の夢や像なれば、
あるがままにあらねばならぬ、
新たしきの創造——われらには能わぬ、
いかなる賢者も、王も、子も。
けれどもファンタージェンのかなた、
そとの世なる国あり、
そこに住むは——富めるひとびと、
このわれらとは異なるものたち！ (S. 109)

そしてファンタージェンの存亡は、幼ごころの君の命＝彼女の名にかかっている。その名は「人の子」につけてもらうしかない。そのような仕組みで、ファンタージェンの存在は、「人の子」に依存している。バステリアンの能力が幾重にも重宝されるのは、ファンタージェンの住人にその能力が欠けているからというだけではなく、その能力がファンタージェンを存在させ、新しく創るものだからである。

ファンタージェンに来たバステリアンの課題は、ファンタージェンを豊かに創りなおすことである。その内実は、望みをもつこと、そして真の望みを見出すことだった。その過程で、彼は新しく名づけをし、物語を作る。ここで、ファンタージェンにおける名と物語、それらと密接にかかわる望みと記憶の働きについて考察してみたい。名、物語、望み、記憶——これらはどれも大きなモチーフであり、本来ならひとつずつ丁寧にそのあり方を検討すべきものであろう。しかしここでは、これらを、「物語の国」であるファンタージェンにあるもの——言葉というモチーフに貫かれたものとして大まかに見ていく。

3.2.1 名と物語

彼の最初の名づけは、「モンデンキント！」と幼ごころの君に呼びかけたことである。この名とともに、彼は本の中へと吸い込まれ、再生した彼女と対面する。幼ごころの君の新しい名すなわち新しいファンタージェンであるから、バステリアンが読んでいた本のファンタージェンは、この時点では消滅している。バステリアンは幼ごころの君とともに、どことも知れぬ暗闇に浮いている。

ここから、バステリアンによるファンタージェンの再創造が始まる。彼はファンタージェ

エンにあって、創世記における神とアダムの役割を兼ねている。つまり、二通りの仕方で創造する。まず、彼の話す物語は、神の言葉のように直ちに現実となる。アマルガント図書館の物語、スメークの物語、イハの物語の場合がそれに当たる。またアダムがしたように、目の前に現れたものをバスティアンが呼ぶと、それがそのものの名となり、存在を確定する。モンデンキント、夜の森ペレリン、色の砂漠ゴアプの場合がこれに当たる。

ただし、名・物語の両方とも、例えば宇宙の始まりと考えられているビッグバンのようなもの、そのときを境にある世界が存在を始めると考えられる始原なのではない。グラオーグラマーンを借りれば、「その名を与えた瞬間から、それはもう昔からずっとあった」のである。グラオーグラマーンは、「過去は物語とともに成立する」と言う。物語（Geschichte）の国とは、すなわち歴史の国である。名も物語も、歴史を背負って実現するのだ。この点で、バスティアンの創造する名と物語とは同格である。名は、物語の最小単位として現れている。¹⁵

〈アダム型〉の名づけの場合、名がファンタージェンの諸々を措定する前に、名づけられるべき対象を形作る根源的な段階がある。望みをもつこと¹⁶がそれである。幼ごころの君については、バスティアンの望みによって現れるわけではなく、前半から連続して存在しているので例外的だが、バスティアンが彼女を「実際に見た」瞬間に名は生まれている。彼女に渡された砂粒は、バスティアンの望みどおり種となって芽を吹き、森となる。彼女にうながされて、バスティアンは森にペレリンと名づける。ゴアプの場合も、誰かにうながされることはないが、望みにより出現した対象に名づけるという方法は同様である。

そして、この類の名づけはゴアプをもって終わる。あらかじめ名をもって現れたグラオーグラマーンを初めとして、それ以降に出会う人物や場所は、所与の名とともに現れる。それは、バスティアンがゴアプを「ファンタージェン—の砂漠」という望みのもとに実現させているからだろう。この望みによって、バスティアンの知っているファンタージェン——前半のファンタージェン——が潜在的に復活している。「ファンタージェンで最も恐ろしい生きもの」として現れたグラオーグラマーンは、新ファンタージェンで最初に現れた旧ファンタージェンの生きものなのだ。旧ファンタージェンの完全な復活は、アトレューとの再会という望みによって果たされる。その望みの発見によって、バスティアンはワープ空間である千の扉の寺を抜け、前半のファンタージェンと自身のファンタージェンとを接続することになる。

¹⁵ しかし、物語による創造と名による創造との間には、創造の帰結である「存在」の意味が別れているという差異がある。物語による創造の導く「存在」が、身体の有無を問題とする存在論的・形而上学的なものであるのに対し、名による創造の導くそれは、命題の真偽を問題とする認識論的・論理的なものである。形而上学と論理学の立場の違いについては、山内志朗：『普遍論争』（平凡社）2008などを参照。

¹⁶ ここでの「望み」は、言葉をただちに現実化するという点において、この作品における「物語」と同じ境位に位置づけられるだろう。

グラオーグラマンとの出会い以降に行われる〈神型〉の名づけは、所有するための名づけと、自身の物語に含まれる名づけ——存在させるための名づけ——である。所有 (haben)・存在 (sein) という、行為のもっとも基本的な形式が、ここでは名によって実現されている。

3.2.2 望みと記憶

名づけをしながらバスティアンは望みを見出し、成就させていく。「偽り」の氾濫と虚無とがそうであるように、ファンタージェンにおける望みの成就と人間界の記憶の喪失もまた、表裏一体である。

バスティアンの望みが成就すると、人間界の記憶がひとつずつ失われるのだが、それらの記憶は恣意的なものではない。バスティアンが望みとひきかえに失う記憶は、プロローグでコレアンダー氏と交わされる会話のなかで作られているのである。コレアンダー氏はバスティアンの話を聞きながら、「弱虫 (ein Schwächling)」「臆病者 (ein Angsthase)」「何をやってもだめなやつ (ein Versager auf der ganzen Linie)」と、彼の特性を容赦なく名指す。またバスティアンは、学校で容姿をからかわれたこともコレアンダー氏に告げている。これらの特性の記憶が、バスティアンが最初に失うものである。その後失われていく記憶も、ここでの会話にほぼ集約されている。¹⁷

失われる記憶は、成就された望みと「反対の自分の特性」¹⁸である、と藤田は指摘する。たしかに初めのうちはそうなのだが、物語が進むにつれて、他者が関わってくるために望みは少しずつ複雑になり (アトレューに尊敬されたいなど)、記憶と望みが反対の特性をもつとは一概には言えなくなる。それでは、両者はどのような関係にあるのか。

よく観察してみると、バスティアンが望みを満たすときに関わることになる人物たちは、消えるべき記憶の化身であることがある。望みの成就とともに、記憶と同じように、彼らはバスティアンから去る——あるいはバスティアンの方が、彼らの元から旅立つ。話を聞いてくれる存在だったクリスタに対応するアマルガント人、いつもバスティアンを笑い者にするいじめっ子たちに対応するシュラムッフェン、子どもであることに対応するアトレュー、学校や物置の剥製などに対応する星僧院などがそうである。また、記憶が消えたあとのバスティアンの属性をもって現れる者もいる。物語を作れなくなっている元帝王の都の住人、個人というものがいないイскарルナリがそれに当たる。

バスティアンが望みを抱くたびに、望みの統治者である幼ごころの君が、ファンタージ

¹⁷ イскарルで失われた「色々な考えをもった人間がいること」という記憶のみ一見異質であるが、これはバスティアンが、十把一絡げに子どもを嫌う古書店主に、子どもにも色々いることを主張したことだろうか。

¹⁸ 藤田、54 頁

エンの地形を変える。それによって現れた地形や生きものたちが、バスティアンの記憶と深い関わりをもっていることは上で述べた通りである。そして新しい地に足を踏み入れ、新しい生きものに出会うたびに、また別の望みが生まれる。記憶と望みとは、どちらがどちらの原因というのではなく、互いに呼応する様相を呈している。

両者の呼応を可能にしているのは何だろうか。それは言葉である。バスティアンの記憶とは、コレアンダー氏との会話であった。望みもまた、もやもやした曖昧な感情のままではなく（バスティアンがそのような状態を過ごしているときは、語り手によってそう語られる）、言葉の形をとって始めて、効力をもつものとなっている。

3.2.3 越境させる名

名は、いまひとつ重要な働きもする。バスティアンが一方の世界から他方の世界へと越境しようとするときに、鍵の役割をはたすのである。「モンデンキント、いま行きます！」と叫ぶとともに、バスティアンはファンタージェンへと吸い込まれ、「父さん！父さん！——ぼく——だよ——バスティアン——バルタザール——ブクス！」と叫ぶとともに、人間界に戻る。これらの台詞が、緑の文字と赤の文字の両方によって書かれている（二度ずつ書かれている）ことも、バスティアンの声が両方の世界で同時に響いたことをはっきりと示している。なぜ、たとえば魔法の呪文のごときものではなく、名が必要なのだろうか？逆に考えるべきだろう。ここには、名——人やものの固有名——が開く世界があるのだ。呼ばれた名の開く世界であるから、その世界は、呼ばれた者の治める世界である。

名を呼ぶバスティアンは、呼ぶことによって、その名の開く世界へと入ってゆく。一方、呼ばれた者は、バスティアンの前から姿を消すことになる。バスティアンが自身を異世界へ越境させるのとほぼ同時に、呼ばれた者も、どこか異世界へと越境しているのである。呼ばれた者はどこへ行くのだろうか。姿は消えても、彼らはその実、名を呼んだ者の内部または身边に存在し続ける。異世界は、バスティアンの内部または身边にある。バスティアンは、自分がその名を呼んだ者を、自身の身に引き受ける。両者は共存するのである。

名、すなわち新たな命を受け取った幼ごころの君は、バスティアンと少しく言葉を交わしたのち、忽然といなくなってしまう。それと同時に、バスティアンの首に、幼ごころの君の名代であるアウリンが唐突に現れる。前半、アトレエユの冒険が終わったときにも明かされたように、アウリンは幼ごころの君自身に等しい。

バスティアンが自分の名を叫ぶ場合も、やはり自分自身が姿を消していると見ることができるだろう。プロローグとエピローグとでは、同じ赤の文字であるにもかかわらず、世界は明らかに一変している。このことを、バスティアンの内面の変化による相対的なものと片づけるわけにはいかない。なぜなら、プロローグで存在していた、バスティアンの盗んだ「はてしない物語」が、エピローグではもともと存在しなかったことになっているか

らである。本は、それが担っていた歴史、つまり本を盗んだプロローグのバスティアンもろとも消えている。消えたバスティアンはどこへ行ったのか。それは、名を呼んだ方のバスティアンの記憶の中である。したがって、エピローグのバスティアンにとっては不可解にも本が消えただけであり、ただ一人、自分が盗みをしたことを知っているのである。

名を呼ばれる者が行く異世界は、バスティアンの内部または周辺にあると述べた。内部または周辺なら、なぜ異世界と言わなければならないのか。それは、名を呼ばれた者がすっかり姿を変えており——幼ごころの君はアウリンへ、プロローグのバスティアンはエピローグのバスティアンの記憶へ——、名を呼んだバスティアンとじかに言葉を交わすことがもはやできなくなっているからである。それらは言語的に異世界なのである。名を呼ぶバスティアンと、呼ばれる者とは、異なる言語の次元に存在することになる。

3.3 非日常の世界における名と物語——まとめ

ファンタージェン——非日常の世界において、名は、何かを所有 (haben) し、存在 (sein) させる働きをする。また、言葉が、ファンタージェンで生まれる望みと人間界での記憶との呼応を可能にし、ファンタージェンを形作る。名や物語、言葉となった望みは、日常の世界とは別の重みをもつ。後半でバスティアンのたどった困難が示しているように、それらは危険なものですらある。ファンタージェンとは、言葉がすなわち身体となる国なのである。ファンタージェンに来る人間は、「ファンタージェンの生きものをその真の姿において見る」と幼ごころの君は言う。ファンタージェンの住人は、人間界から見るかぎりでは空想の産物である。また、彼らが人間界に来てしまえば「偽り」となる。つまり〈本当にはあるはずのない物事を指し示す言葉〉なのだが、人間がファンタージェンに来るなら、つまり〈言葉すなわち身体〉の次元に入り込むなら、実に様々な姿で生きている彼らを見ることになるのである。

そして、両世界の往還の際には、名が鍵となる。つまり、どちらも名によって開かれる世界、名を呼ばれた者が中心となる世界である。そして、名を呼ぶバスティアンと呼ばれる者とは、共存するが、異なる言語の次元に存在することになる。

結論として、日常と非日常とのあいだの往還とは、言語の次元のあいだの往還だと言えるだろう。バスティアンにとって「はてしない物語」を読むこととは、異なる言語的次元へと入り込むことである。そして、エピローグでコレアンダー氏の言うように、バスティアンが「両方の世界を健やかにする」語り手となる資格をもつのは、非日常の言語の次元から戻ってきたからであった。

4. 往還の体験から得たもの

4.1 アトレューユとバスティアン

バスティアンを非日常の世界から日常の世界へと帰したのは、アトレューユ、そして幸運の竜フッフールである。フッフールは、生命の水の言葉を通訳する役目をはたしている。帰還の鍵である自分の名をバスティアンは忘れてしまっていた。それをアトレューユが保存しており、バスティアンに代わって叫ぶ。アトレューユが証人となったことで、バスティアンは人間界への帰還を認められる。

アトレューユの叫んだバスティアンの名も、〈越境させる名〉である。それはバスティアンのように自分自身を越境させるのではなく、呼ばれた者だけを越境させている。名を呼んだアトレューユと、呼ばれたバスティアンの関係はどうなったのだろうか。

ファンタージェンの出口であるアウリンの生命の水は、バスティアンの名のほかにも、彼がファンタージェンで始めた物語すべてに結末をつけることも求める。ただし代理人でも可とされ、アトレューユがその役割を引き受ける。

「水たちはこう言うんですよ。どうすることもできないが、誰かおまえに代わってその仕事を引き受ける者がいれば別だ、とね。」（…）「いるよ」アトレューユが言った。「ぼくだ」（S. 418）

その約束は守れないことが、バスティアンにはわかっていなかった。ずっとずっとあとになって、ある者がバスティアンの名においてやってきて、代わりに約束を果たしてくれることになった。（S. 229）

アトレューユはバスティアンの課題の遂行——物語を締めくくることが——を、〈バスティアンの名において〉引き受ける。バスティアンが幼ごころの君の名代を受け取り、プロローグの自分から記憶を引きついでように、アトレューユはバスティアンの名を受け、彼の〈代理人〉となるのである。サイーデの城に忍び込む際、アトレューユがバスティアンに変装し、身代わりとなって彼を助けることも、アトレューユがバスティアンの代理人となることの伏線と見ることができるだろう。

二人はそもそも、明らかに相補的な存在である。本の読者と登場人物であり、容姿・性格・能力などの点でも（もともと）対照的である。バスティアン自身、アトレューユの名が「みなの子 (Der Sohn aller)」(S. 44) を意味することを知り、自分をその対極である「だれでもない子 (Der Sohn niemand)」(Ebd.)と位置づける。また、アトレューユは前半で、「真の内面の存在をあるがままに」映すとされる魔法の鏡の門にて、本を読むバスティアンの姿を見ている。それは、学校の物置で「はてしない物語」を読んでいるバスティアンである。アトレューユの「真の内面の存在」がバスティアンであるとはどういうことなのか。

確かなことは、バスティアンが、物語を読み進めるにつれ相当にアトレユに感情移入し、心理的に同一化していることである。アトレユのように馬に乗る真似をしてみたり、アトレユが食事を取るときには自分も一緒に何か食べたり、という具合である。アトレユが魔法の鏡の門に見たのは、そのときに自分の物語を読んでいる者、自分の内面に入り込んでいる者なのである。鏡を介して二人が出会ったこの瞬間、バスティアンは文字通りアトレユの鏡像となり、二人の相補性が決定的なものとなっている。

相補う二人は、ファンタージェンにおいては何よりも友人であった。このことも、コリアンダー氏によって「幸運なこと」とされている。この友人関係はどのようなものなのか。

ファンタージェン人であるアトレユは、最も外面的には、インクの連なり——書かれた名¹⁹である。バスティアンに読まれることで、彼は命を得る。しかし、アトレユがバスティアンの操り人形であったわけではない。バスティアンにはアトレユをどうすることもできない。バスティアンが彼と同一化してしまうのは、アトレユがなぜか生きているからである。後半においても、アトレユの思惑はバスティアンのそれとは逆を行く（帰りたい／帰りたくない）。バスティアンがアトレユの言動をことごとく恣意的に自己中心的に解釈するため、とうとうアトレユは反乱を起こす。書かれた名、すなわち言葉を身体とする存在であるアトレユは、バスティアンを助ける役を負いつつ、もっとも手厳しく刃向かいもする。彼はどこまでも自律性をもつのである。

またアトレユが特異なのは、ファンタージェンの人物でありながら、言語的創造に近いことをする点である。この点でも彼は、バスティアンと相補うような行為をする。アトレユはウユララと話す際、韻文を作る。もっとも韻文はウユララとの通信手段であり、物語の論理・筋の運びからみても、創造には含まれていない。しかし、ウユララのお告げをエンギウックに「ほとんど一字一句そのままに」(S. 114) 伝える様は、あたかも叙事詩人のようである。また、見事に韻律をそろえた韻文を作り、われを忘れて（実際に、彼はこのとき記憶をすべて失っている）声だけの存在に呼びかける彼の行為は、たとえばシャーマンと呼ばれる人々の営みのような、原始的な性格を帯びている。一方、バスティアンの特性は〈想像し語る〉ことだった。バスティアンが物語を語る場面はいくつかあるが、どの物語も幻想的・叙事的、ときには神話的なものである。また、バスティアンは語り手として権威をもつ。彼はファンタージェンにおいて、何もかも知っている者として物語を伝える語り部——物語するという使命を担う者——となる。ファンタージェンで友情を結んだのは、〈叙事詩人〉と〈語り部〉、つまり詩人と語り手のうちでも原始的な性格の者たちなのである。その原始性は、2人が子どもであることにも良く表れているだろう。

バスティアンと相補う友人であり、詩の言葉を持ち、何より自身が自律性をもつ言葉の

¹⁹ 古老と幼ごころの君とが出会う場面で、死んだものとしての書かれた言葉／生きたものとしての話された言葉というモチーフが出てくる。

存在であるアトレユとは、バスティアンの内なる〈詩の言葉〉ではないだろうか。友人として助言してくれていた自らの〈詩の言葉〉を聴き損ね、殺しかけ、しかしついにはそれに救われるということ、バスティアンはファンタージェンで体験したのだろう。

4.2 エンデの詩学

(…) 詩人や小説家が本を書くとき、そこに登場する人物たちは、みんなその作家の心のなかに生きているのよ。その人たちが、ひとりひとり、あなたたちへの手紙にサインしたの。ただ、登場人物たちはそのとき、ミヒャエル・エンデという人の手を利用しました。(…)

それは、ソロモン王のようなご名答だ。²⁰

ジム・ボタンシリーズの登場人物からサインをもらった子どもの疑問（「このサインは登場人物たちが書いたのか、作者であるエンデが書いたのか」）と、それに対する、とあるシュタイナー学校教師の答えを紹介され、エンデは上のように反応している。

また、書くことについて、エンデはラスト・インタビューで次のように語っている。

本を書くというのは、言葉でひとつの現実をつくることです。そして、この言葉たちはある意味で自律性を持っている。言葉は（作家が）自分で作るわけじゃない。それはすでにそこにあるものです。それに、言葉は、現れるものでもある。そして、つかみかたが乱暴でなければならないほど、さわやかたが、そっとやさしくあればあるほど、現れるものも多くなるし、言語がおのずから提供してくれるものも多くなります。わたしはそれを頼りにすることがよくあるのです。わたしの旅には大雑把な地図があって、残りはわたしに向かって生じるのだし、どこかから与えられるわけであり、わたしに起きるのです。²¹

エンデにとって、物語を語る／書く主体は「作家」ではなかった。「言葉」が主体となって物語を導き、作家を冒険させるのである。そして、「登場人物たち」はその自律性を、「作家」の手を借りて実現する。この仕組みは、「はてしない物語」に出てきた「はてしない物語」の作者、さすらい山の古老の書き方を思わせる。彼がしているのは、白いページの上に筆をすべらせることだけである。古老は、バスティアンの読んでいる「はてしない物語」を書くばかりではなく、バスティアン自身を含む物語、すなわちエンデの書いた『は

²⁰ 子安美知子：『エンデと語る』（朝日新聞社）1989、24頁

²¹ 田村、22頁

てしない物語』をも書き始める。つまり、この人物の行為は、エンデ自身の仕事の様相を誇張したものと言えるだろう。²²

この作品は、各章の始まりの文字が、A から Z までのアルファベット順となっている。バスティアンの読む 26 章の物語は、つまり百科事典的でもある。バスティアンは自らの言葉の世界のすべてを、のっぴきならぬ〈現実〉としてさすらい、アトレューユという友人／代理人を見出した。バスティアンを物語のなかに引きずり込んだ張本人であり、また帰した者、バスティアンの課題を引き受けた者である〈詩の言葉〉としてのアトレューユこそ、バスティアンを「ほらふき」から「語り手」へと成長させることになる特別な存在なのである。

〈アトレューユがバスティアンの名においてバスティアンの物語を締めくくる〉とは、それではどういうことなのか。アトレューユの性格をエンデの詩学に照らして考えてみると、次のように解釈できないだろうか。大人になって作家となったバスティアンの、名——ファンタジーエンに行ってきた彼にとっては、すなわち体——を借りて、バスティアンの内なる〈詩の言葉〉であるアトレューユが、物語の続きを書くのだと。

4.3 日常を拡大する非日常の言語

自分で作った物語を自分自身にはなして聞かせようものなら、まわりがすっかり見えなくなったし、終わりのところでようやく、夢から覚めるように、はたと気がつくこともままあった。(S. 26)

「ある少年が、ある本を読みながら、物語の中へ文字どおり巻き込まれてしまい、かろうじて帰り道を見つける」²³——『はてしない物語』の生まれるきっかけとなったこのメモは、そのまま物語の骨格となっている。その骨格はといえば、上に引用した、バスティアンが日常的に体験していることと相似的である。このことは、両世界の往還についても言える。バスティアンがまだ一読者にすぎなかった前半でも、その一読者のレベルで、彼は日常と非日常とを行き来しているのである。すぐに気づくように、学校の時計が鳴るたびにバスティアンは本から考えをそらし、自身の日常について思いをめぐらしている。²⁴

日常と非日常とのあいだを往還すること——それもまた、ここではひとつの日常、バス

²² 本論では、古老の対極の存在とされる幼ごころの君——エンデ詩学の重要な体現者のひとり——について考察することができなかった。今後の課題としたい。

²³ Hocke, Roman / Neumahr, Uwe (Hrsg.): Michael Ende Magische Welten. Henschel, 2007, S. 103

²⁴ バスティアンの、読書しつつもたびたび日常に戻ってくるこの行為は、ブレヒトの異化効果が(意識的にせよそうでないにせよ)エンデなりにアレンジされたものではないかという指摘は興味深い。(Vgl. 土屋)

ティアンの日常の一面であった。「はてしない物語」とは、物語を読む、物語を作って語るといふバスティアンの日常の体験を、彼自身の神話として拡大して見せたものと言える。

そのような「自分自身の神話」を読むバスティアンの物語を、私たち読者は『はてしない物語』として読む。エンデは、自身の書いた本がバスティアンの読む本と同じになるように、字の色や装丁にも強くこだわった。バスティアンが生命の水を飲み——それを飲むと、「愛すること」(S. 394)ができるようになるという——、その水を人に与えられる存在になったことと相似的な体験を、自身の読者にも望んだゆえだろう。

Vom Aufschneider zum Erzähler

Der Hin- und Rückweg zwischen Alltag und Nicht-Alltag in
Michael Endes *Die unendliche Geschichte*

Ayuko MIYOSHI

Michael Endes *Die unendliche Geschichte*, die manchmal als eine Art von Bildungsroman gelesen wird, kann auch in poetologischem Sinne als Endes Erzähltheorie gelesen werden. Damit ist angedeutet, dass der Held Bastian, der einmal „Spinner“ oder „Aufschneider“ genannt wird, nach dem gelungenen Wechsel zwischen Menschenwelt und Phantasien zum guten Erzähler geworden ist: Er ist vom Aufschneider zum Erzähler geworden.

Was soll „Menschenwelt und Phantasien“ bedeuten? Diese Welten – das Außen und Innen des Buches – werden oft im Verhältnis von »Wirklichkeit / Nicht-Wirklichkeit« verstanden. Zwar hält Bastian am Anfang das Außen des Buches für „Wirklichkeit“ und das Innen für „nur eine Geschichte“, aber mit der Zeit wird diese Unterscheidung sinnlos, als klar geworden ist, dass Bastian *wirklich* ins Buch hineingeraten ist. Für ihn werden die beiden Welten »Wirklichkeit«.

Es ist anregend, dass J. Hörisch diese Geschichte zum Thema „Alltäglichkeit“ kommentiert. In der Tat kann man nach der Logik dieser Geschichte die Differenz von Alltag und Nicht-Alltag klar erkennen.

Was Bastian vollbracht hat, war das Hin und Zurück zwischen Alltag und Nicht-Alltag. Das Größte, das Alltag und Nicht-Alltag bei dieser Geschichte unterscheiden sollte, ist der »Name« d.h. das Motiv der Sprache. Während in der Alltagswelt die Namen nur wie ein Etikett sind, müssen sie in der Nicht-Alltagswelt Phantasien Leben und Tatsachen schaffen. Und der Name ist der Schlüssel, wenn Bastian von der einen Welt in die andere Welt gehen will. Da gibt es die Welt, die der Name – der Eigenname – öffnet. Der Unterschied zwischen Alltag und Nicht-Alltag in dieser Geschichte ist derselbe, der die Ebenen der Sprache kennzeichnet.

Und was für Bastian besonders wichtig ist, dass er in Phantasien einen Freund haben konnte. Der Freund Atréju ist ein Charakter, der als Vertreter Bastian gelten kann. Er übernimmt die Aufgabe, alle Geschichten Bastians in Phantasien *im Namen Bastians* zu Ende zu führen. Das kann man so interpretieren: wenn der erwachsene Bastian die Geschichte erzählt, dann ist der, der eigentlich im Namen – nämlich Körper – Bastians erzählt: Atréju.